

2/16-22 #5 私たちに安息を与える方としてのキリスト:I  
「マタイ11:28 すべて労苦し重荷を負っている者は、私に  
来なさい。そうすれば、私はあなたがたに安息を与  
える。29 私は心の柔和なへりくだった者であるから、  
私のくびきを負い、私から学びなさい。そうすれば、あ  
なたがたは魂に安息を見いだす。30 なぜなら、私のく  
びきは負いやすく、私の荷は軽いからである」A  
この  
労苦は、律法の戒めや宗教的規定を守ろうと努力す  
る労苦を指すだけでなく、あらゆる働きにおいて成功  
しようとして奮闘する労苦も指しています。このよう  
に労苦する人はだれでも、常に大きな重荷を負って  
います。B  
主は御父の道を認め、神聖なエコノミーを宣  
言して御父をほめたたえた後、このような人々が彼に  
来て安息を得るようと、主は召しました。C  
安息は、  
律法や宗教の下、あるいはあらゆる働きや責任の  
下の労苦と重荷から解放されることを指すだけでなく、  
完全な平安と全き満足をも指しています。D  
主のくび  
きを負うとは、御父のみところを取ることです。それは、  
律法や宗教のどんな義務によって規制されたり支配  
されたりすることでもなく、または何かの働きによって  
奴隷にされたりすることでもなく、御父のみところ  
によって拘束されることです。E  
主はそのような生活をし  
て、御父のみところ以外の何も顧慮しませんでした。  
主はご自身を完全に御父のみところに服従させまし  
た。ですから、主はご自身から学ぶようと、私たち  
に求めています。1  
信者たちは、主の原型にしたがって、  
主のくびき(神のみところ)を負うことによって、また神  
のエコノミーのために労苦することによって、彼らの霊  
の中で主を複写します。2  
主は、彼の全生涯にわたっ  
て、御父に服従し、従順であって、ご自身の服従と従  
順の命を私たちに与えました。3  
キリストは最初の神・  
人でした。私たちは多くの神・人です。私たちは、キリス  
トが神に絶対的に服従したことにおいて、またキリス  
トが神をもって極みまで満足したことにおいて、キリス  
トから学ばなければなりません。4  
神は、ご自身の目に  
喜ばれることを、イエス・キリストを通して私たちの中  
で行なっています。それは私たちが、神のみところを行  
なうことができるためです。神は、ご自身の大いなる喜  
びのために、私たちの内で活動して、願わせ働かせて  
います。F  
柔和、あるいは溫柔であるとは、反対に抵抗  
しないことを意味し、へりくだるとは、自分を高く見ない  
ことを意味します。主はすべての反対の中で柔和で  
あり、すべての拒絶の中で心がへりくだっていました。  
G  
彼はご自身を御父のみところに完全に服従させ、ご  
自身のために何を行なうことも願わず、ご自身のた  
めに何かを獲得しようと期待しませんでした。ですから、  
状況がどうであっても、彼は心の中に安息を持って  
いました。彼は御父のみところをもって完全に満足し

ていました。H  
主のくびきを負い、彼から学ぶことによ  
って私たちが見いだす安息は、私たちの魂のためです。  
それは内側の安息であり、性質において単なる外面  
的なものではありません。I  
私たちが主の模範にした  
がって主から学ぶのは、私たちの天然の命によ  
ってではなく、復活の中の私たちの命としての主によ  
ってです。エペソ4:20  
しかしあなたがたは、そのようにキ  
リストを学んだのではありません。21  
もしあなたがたが  
真に彼に聞き、そして彼の中で、イエスにあるあの実  
際にしたがって教えられているのであれば、J  
主のくび  
きは御父のみところであり、彼の荷は御父のみところ  
を遂行する働きです。そのようなくびきは負いやすく、  
苦痛ではありません。またそのような荷は軽く、重くあ  
りません。K  
「(負い)やすい」というギリシャ語は、「用いら  
れるのにふさわしい」を意味します。ですから、良い、  
親切な、柔和な、溫柔な、容易な、楽しいを示し、過酷  
な、厳しい、陰しい、苦痛の反対です。L  
私たちは、私た  
ちに対する主のくびき(御父のみところ)を負い、彼か  
ら学ぶなら、私たちの魂に安息を見いだします。神の  
エコノミーのくびきはこのようなです。神のエコノミーにお  
けるあらゆる事は重荷ではなく、享受です。II  
神の住  
まいの建造に関する長い記載の後、出エジプト記  
31:12-17で、安息日を守る戒めが繰り返されています。  
コロサイ2:16-17によれば、キリストは、安息日の安息  
の実際です。キリストは、私たちの完全さ、安息、平穩、  
完全な満足です。出31:13  
「イスラエルの子たちに  
語って言いなさい、『あなたがたは必ず私の安息日  
を守らなければならない。それは、あなたがたの代々に  
わたる、...15 六日間は仕事をするが、七日目は完全  
な安息の安息日であり、エホバにとって聖である。A  
幕  
屋を建造する働きの命令の後、安息日に関する  
言葉が挿入されています。これが示すのは、建造す  
る者たち、働く者たちが主のために働くとき、どのよう  
に主と共に安息するかを学ぶよう、主が彼らに告げた  
ということです。B  
もし私たちが、どのように主のために働  
くかを知っているだけで、どのように彼と共に安息す  
るかを知らないなら、神聖な原則に反して行動してい  
ます。1  
神が第七日に安息したのは、彼がご自身の働  
きを終えて満足したからです。神の栄光が現されたの  
は、人が神のかたちを持ち、神の権威が行使されて、  
神の敵サタンを征服しようとしていたからです。人が  
神を表現し、神の敵を対処している限り、神は満足し、  
安息することができます。2  
後ほど、第七日は安息日  
として記念されました。神の第七日は人の第一日  
でした。3  
神は人の享受のために、あらゆるものを備えて  
いました。人は創造された後、神の働きに加わったの  
ではなく、神の安息の中へと入りました。4  
人が創造  
されたのは、まず働くためではなく、神で満足し、神と共

に安息するためでした。安息日は人のためにあるのであって、人が安息日のために造られたものではありません。**C**出エジプト記31:17は言います、「六日の間にエホバが天と地を造り、七日目に安息し憩われた」:

**1**安息日は神にとって安息であっただけでなく、憩いでもありました。**2**神は彼の創造の働きが完成した後、安息しました。彼は御手のわざを見つめ、天、地、すべての生き物、特に人を見て、「非常に良い!」と言いました。**3**神は人のゆえに憩われました。神がご自身のかたちに霊のある人を創造したのは、人が彼と交わりを持つことができるためでした。ですから、人は神の憩いでした。**4**神は人類を創造する前、「独身」でした。神は人が彼を受け入れ、彼を愛し、彼で満たされ、彼を表現して彼の妻となることを願いました。神は未来の永遠において、妻、新エルサレムを持ち、それは小羊の妻と呼ばれます。**5**人は憩わせる飲み物のようであって、神の渴きをいやし、彼を満足させました。神は彼の働きを終えて、安息し始めた時、人を彼の同伴者として持ちました。**6**神にとって、第七日は安息と憩いの日でした。しかしながら、神の同伴者である人にとって、安息と憩いの日は第一日でした。人の第一日は享受の日でした。**D**私たちが享受を得る前に、神は私たちに働くことを求めません。これは神聖な原則です。私たちは彼と共に、また彼に対して満ち満ちた享受を持った後、彼と共に働くことができます。**1**もし私たちが、どのように神と共に享受を持つか、どのように神ご自身を享受するか、どのように神で満たされるかを知らないなら、どのように彼と共に働き、彼の神聖な働きの中で彼と一になるかを知りません。人は、神が彼の働きの中で完成したものを享受します。**2**ペンテコステの日に、弟子たちがその霊で満たされたことは、彼らが主に対する享受で満たされたことを意味します。彼らがその霊で満たされていたので、他の人は、彼らがぶどう酒に酔っていると思いました。**3**実は、彼らは天のぶどう酒に対する享受で満たされていたのです。彼らはこの享受で満たされた後はじめて、神との中の中で神と共に働き始めました。ペンテコステは第八週の第一日でした。ですから、私たちはペンテコステの日にに関して、第一日の原則を見ます。**4**神にとっては、働いて安息する事柄です。人にとっては、安息して働く事柄です。**E**私たちは召会を建造するという神の神聖な働き(幕屋を建造する働きで予表される)を行なうとき、私たちが神の民であり、神を必要としていることを示すしるしを帯びなければなりません。その時私たちは、神のために働くだけでなく、神と一になることによって神と共に働くことができます。神は私たちの働く力、また労苦する活力となります。**1**私たちは神の民であって、神に私たちの享受、力、活力すべて

となっていていただく必要があるというしるしを帯びているべきです。それは、私たちが神のために働き、彼を尊び、彼の栄光を現すことができるようになるためです。**2**安息日が意味するのは、私たちが神のために働く前に、神を享受し、神で満たされる必要があるということです。ペテロは、彼を満たす神、すなわち彼を満たす霊によって福音を宣べ伝えました。ですから、ペテロは神の同労者であるというしるしを持っており、彼の福音の宣べ伝えは神にとって誉れと栄光でした。**3**神の民として、私たちが帯びなければならないしるしとは、私たちがまず神と共に安息し、神を享受し、神で満たされているということです。それから私たちは、私たちが満たす方と共に働きます。さらに、私たちは神と共に働くだけでなく、神と一である者として働きます。**4**私たちは神の民に語るとき、私たちの主が、言葉を供給するための私たちの力、活力、すべてであるというしるしを帯びることを、常に求めなければなりません。**F**安息日を守ることはまた永遠の合意、あるいは永遠の契約であり、私たちがまず神を享受し神で満たされることによって、それから神のために、神と共に、神との中の中で働くことによって、神と一であることを、神に保証します。**1**私たちが自分自身で主のために働いて、彼を飲んで食べることによって彼を取り入れ享受することがないのは、厳粛な事柄です。**2**ペテロはペンテコステの日に語っていた時、内側でイエスにあずかり、彼を飲んで食べていました。**G**安息日はまた聖別の事柄でもあります。私たちは主を享受し、それから彼と共に、彼のために、彼と一になることによって働くとき、自然に聖別され、俗的なすべてのものから神へと分離され、神で浸透されて、肉的で天然的なものはすべて置き換えられます。**H**召会生活の中で、私たちは多くの事を行なっても、まず主を享受することがなく、また主と一になることによって主に仕えることがないかもしれません。そのような奉仕の結果は霊的な死と、からだの交わりを失うことです。**I**神の住まいに関するあらゆるものは、私たちを一つの事柄に導きます。それは主の安息日と、その安息と憩いです。召会生活の中で、私たちは幕屋の中におり、幕屋は私たちを安息に導き、神の定められた御旨と彼が行なったことに対する享受に導きます!**J**幕屋とそのすべての調度品を建造する働き(召会を建造する主の働きを予表する)は、神に対する享受をもって開始し、その期間、継続して神を享受することによって憩いを持つべきです。この事が示すのは、私たちが神のために働くのは自分自身の力によってではなく、神を享受することによって、また神と一になることによってであるということです。これが私たちの霊の中の内なる安息としてのキリストをもって、安息日の原則を守ることです。